

空間-時間と物質について

— ヘーゲルにおける「物体論」 —

小林 裕 明

Zusammenfassung

Der Zweck dieser Abhandlung ist es, durch die Betrachtung von Hegels Begriff von Raum und Zeit seinen Begriff von „Körper“ zu erfassen. Bei Hegel erwerben der Raum und die Zeit als die ersten Bestimmtheiten der „Natur“ ihre Lage. Die Rückkehr des Raum in sich in seiner (dialektischen) Entwicklung schliesst die Entwicklung in die Zeit und die Rückkehr davon („Ort und Bewegung“) in sich ein, und dadurch vollendet sie sich. Dies ist das Setzen des „Körpers“. In der Logik erhält die Totalität des „Dings“, auf die Lehre des Seins gesetzt, ihren Inhalt im weiteren Verlauf. In der Entsprechung vereinzelt die Entwicklung in der „Mechanik“ in Wahrheit den „Körper“ (die Erlangung der Individualität). Aber nicht nur das, auf diese Individualität werden die individuellen Qualitäten in der „Physik“ gewonnen, und im Leben stimmen das Innere und das Äussere überein. Wie die „Wirklichkeit“ in der Lehre des Wesens die formelle Einheit des Begriffs ist, so ist der Geist im Leben angenommen, d. h. der „Körper“ ist das Gefäss, das den Geist annehmen soll.

キーワード……空間 時間 物質 物体 ヘーゲル

0. 序

本稿は、ヘーゲルの空間-時間概念の考察を通じて、その「物体」概念を把握することを目的とする¹⁾。空間-時間概念(そして物質-物体概念)については、もとより、古代から論じられてきたものである。ヘーゲルの空間-時間論の考察において、そこに、古代の質的空間から近代的空間論までが総合されており、それだけでなく、カント的批判をも取り込んでいることが見て取れる。そして、その結果、本稿において「物体論」として考察されるものの体系的位置付けもまた、古代、中世から近代に至る哲学的課題の総括であることが理解されるだろう。

そこで、まず、1章においてヘーゲルの空間-時間論を考察する。そして、その上で、2章において、ヘーゲルにおける「物体」論の位置付けについて論ずることにしたい。

1. ヘーゲルの空間-時間論

それでは、ヘーゲルにおける空間-時間論を考察したい。そこで、まず、ヘーゲルにおいて、空間と時間という形式は、ただ客観的なものでも主観にのみ属するものでもないことを注意し

ておきたい。しかも、カントの空間と時間が、カントの意味(主観的観念論)において主観客観であることとは異なって、ヘーゲルにとって、空間と時間は、学そのものにおける円環構造によって、主観的なものであると同時に客観的なものであるように媒介されている。この構造がまた、「自然」の最初の規定としての空間と時間の位置付けにも関係している。

空間-時間の展開と量 - 「自然」の論理学に対する位置付け

ヘーゲルは、『エンチュクロペディー』の「自然哲学」において、「自然」の最初の諸規定として空間と時間を展開している²⁾。ここで、ヘーゲルが述べるところの論理学との関係における空間-時間の位置付けを考察しておこう。

ヘーゲルは、E § 254 Anmerkung において、次のように、空間と時間を、そのものとしては、論理学における「量」(Quantität)に帰している。

「点、対自存在は、そのために、むしろ、空間の否定、しかも、空間において定立されたその否定である。空間の無限性に関する問いは、同様にこれによって決定される(§ 100 Anm.)。空間は、一般に、純粋な量である。もはやただ論理的な規定としての量にすぎないのではなく、直接的にそして外的に存在するものとしての量である。それ故に、自然は、質的なものではなく、量的なものでもって始まる。というのは、自然の規定は論理的な存在のように抽象的な最初のものそして直接的なものではなく、本質的にすでに自身において媒介されたもの、外在そして他在[*das in sich Vermittelte, Äußerlich- und Anderssein*]であるからである。」(E § 254 Anmerkung)

ここで、自然においては、「質的なもの」ではなく、「量的なもの」から始まるとされ、その理由が、自然が「自身において媒介されたもの、外在そして他在」であるからとされている。ヘーゲルにとって、質とは、そもそも、「存在と同一的な規定性」(E § 254 Zusatz)であり、論理学-存在論はそれ故に質から始まる³⁾。しかし、自然は、そのような直接性においてはなく、(絶対的)理念の外在・他在として「自身において媒介されたもの」である。このことが「自然」の根本的な規定を形成している。論理学の「量」においては、質論の結論である一者(Eins)の運動、連続と不連続の間の運動が、量的運動原理であった。これに対して、ここでは、「絶対的理念」を「一者」(上の「対自存在」⁴⁾)として量的運動が展開される。こうして、自然は、論理学とは異なり、「量的なもの」から始まるのであり、このような意味で、自然において展開された量的運動が、空間と時間と見なされうる⁵⁾。そして、それ故に、ヘーゲルにとって、空間と時間は、論理学において扱われるものではなく、本来的に、「自然」の規定であり、「自然」において初めて問題となるのである。

この「自然」の哲学において、ヘーゲルは、まずその「力学」を、「a. 空間」、「b. 時間」、「c. 場所と運動」と展開している⁶⁾。これに従って、以下、「自然哲学」における空間-時間の展開を考察したい。

1-1. 空間の展開

(1)空間の展開とその3次元性

それでは、空間の展開を見ていきたい。上のように、自然が「量的なもの」から始まるにしても、やはり、自然は、その展開においてその直接的なものから始まる(ヘーゲルは、時間に対しては空間を質的な規定としている)。それが、空間である⁷⁾。

ヘーゲルは、始めに、空間の持つ「3つの次元」について次のように述べる。

「空間は、即自的な概念として、一般に、その**区別**をそれに即して持っており、[しかも、⁸⁾α)その無関心性において直接に、ただ**相違している**にすぎない全く没規定的な3つの次元を持っている。」(E § 255)

このように、ヘーゲルはある総体性を前提し、まず、α)として空間が相違的な全く没規定的に区別を持つとする。これは、同 Anmerkung に述べられているように、高さ(Höhe)、長さ(Länge)、幅(Breite)という相互に無関心な諸方向だろう⁹⁾。しかし、ヘーゲルにとって、「空間がまさに3つの次元を持っているという必然性を演繹すること」(E § 255 Anmerkung)は、「概念の本性」に基づくものであり、ヘーゲルは、E § 256 において β)としてその展開を論じている¹⁰⁾。

点：「β)しかし、区別は、本質的に、規定された質的な区別である。そのような区別として、区別は、1. さしあたって、空間が直接的な**区別のない**相互外在であるのだから、空間そのものの**否定**であり、**点**である。」(E § 256)

線：「2. しかし、否定は、**空間の否定**である。即ち、この否定は、それ自身空間的である。点は、本質的にこのような関係としては、即ち、自身を否定するものとしては、**線**、**点の第一の他在**、即ち、**点の空間的存在**である。」(ebd.)

面：「3. しかし、他在の真理は否定の否定である。それ故に、線は**面**へと移行する。」(ebd.)

表面：「面は、一面においては、線と点に対しての規定性、そうして、面一般であるが、しかし、他面においては、止揚された空間の否定であり、従って、今や否定的な契機を自身において持っているところの空間的な総体性の回復、**個別的な全体の空間を分離するところの取り囲む表面**である。」(ebd.)

このように、ヘーゲルは、空間の諸規定として、点から線、面、表面へと空間を展開させる¹¹⁾。ここで、「点」は、「空間そのものの否定」であるとされている。しかし、先に、点は「対自存在」とされていたのであるから、点は、この「対自存在」が空間という相互外在へと入り込む接触点と言ってもよいであろう¹²⁾。そして、線は点の現存在であるが、線が点の現存在であることが面であり、点の自己還帰である¹³⁾。さらに、この面が点の自己還帰であることそのものが立体であり、この立体であることは、「直観」(Anschauung)に他ならない¹⁴⁾。空間の展開は、「空間の総体性の回復」であり、空間の自己還帰であるが、面の展開は、その自覚である。「空間の総体性の回復」のこのような運動において「時間」がある¹⁵⁾。

ここで、空間がその否定性である時間との関係においてのみ考察される場合には、それは時

間と共にのみ総体性を形成しうるのであるから、「立体」は、空間の規定としては定立されていない(同様に「立体」は空間の契機ではない)。「個別的な全体の空間」は、「表面」によって分離されているに留まる¹⁶⁾。即ち、それ自身全体であるような個別的空間は、ここではまだ定立されていない¹⁷⁾。ここで、空間そのものは、時間として定立されているのである。

(2)空間の「質」性に関して—概念の展開との比較において—

上の空間の展開において、空間の諸契機、点、線、面は、「質的」区別である(E § 256)。これは、勿論、「量」論において登場してくるその質的規定性に関連付けられるであろう。しかし、論理的展開を見るときに、「空間」の展開は、「存在」の展開、即ち、存在、無、成ることの展開と理解されう。このとき、点、線、面は、むしろ、現存在(Dasein)において定立された「質的区別」である。

ここで、これらの点、線、面に関して、形式的に、空間-点-線、点-線-空間(面)、線-空間-点という諸図式を考えることができる。点、線、面(表面)は、本来、それぞれ、これらの諸図式と異なるものではない。しかし、これらの諸推論の推論(諸円環の円環)の完成は、「自然」の運動全体の目標である。この展開を、論理学における概念の展開と比較すると以下のようになる。

概念の形式的展開においては、概念の諸契機(普遍、特殊、個別)の端的な展開がまずなされる。そして、それが、その現存在として概念の判断が定立され、その展開の結果、推論の体系が形成される。ここでは、A.「空間と時間」の展開全体が、概念諸契機の展開と考えることができる。普遍、特殊、個別の展開が、それぞれ、「空間」、「時間」、「場所と運動」に対応している。概念の諸契機の展開においては、普遍は、まずその内部で特殊と個別へと展開されるが、その還帰は、普遍の外部としての特殊と個別への展開を介して完成される。これに対して、「空間」の展開においては、空間の内部におけるその諸契機の展開が、点、線、面を形成し、その外部への展開が、「空間」、「時間」、「場所と運動」を形成する。即ち、「空間」の展開において、その成果は表面(~Dasein)であり、この内的展開において、総体性としてその成果は定立されていない。この内的展開の成果は、むしろ、無限遠点を含む射影直線と言うべきものである¹⁸⁾。さらなる外的展開と併せて、即ち A.「空間と時間」全体において初めて、諸個別の総体性が定立され、「判断」へと移行する。この還帰の成果は、空間-線という「判断」である。さらに空間-点-線、点-線-空間(面)、線-空間-点の諸推論が全部揃い「3重の推論」が(機械論的に)形成されるのは、「力学」全体においてである。

このように、「空間」の展開における点、線、面は、それ自身、具体的(計量的¹⁹⁾)なものではなく、点とその否定、否定の否定として端的に立てられた諸区別として、立体の「表面」に浮かび上がっているにすぎない。これが「質的」の意味である。そして、「立体」そのものが定立されていない以上、そのことの意味もまだ定立されておらず、「空間」の展開の成果である「表面」も、A.「空間と時間」の展開によって真に(~射影平面として)定立されるのである。

1-2. 時間の展開

それでは、「時間」の展開を考察していきたい。ヘーゲルは、E § 257 より、b.として「時間」を論じている。ヘーゲルは次のように述べる。

「しかし、点として空間へと関係しそして空間においてその諸規定を線と面として展開するところの否定性は、自己外存在の領域において同様に**対自的**にあり、そして、自己外存在の領域におけるその諸規定をしかし同時に[自ら]自己外存在の領域における諸規定として定立するものでも、その際に静止的な相互並在に対して無関心的なものとして現象するものでもある。そのように対自的に定立されると、この否定性は、**時間**である。」(E § 257)

空間の展開における否定性は、点が線となる運動そのもの、即ち、点が線として現存在することの定立であり、そして、このことが、点、線、面という空間の展開全体である。ここで、時間は、上で考察した意味において、この空間の展開の「否定性」であり、時間は、空間の対自態である。こうして、時間である否定性は、自己外存在の領域において「定立するもの」(ebd.)として定立されている。これは、ここで、空間の展開の否定性が、空間において原理として定立されていることを意味している。この原理によって、空間は相互並在であり、そして、この原理と共に、空間の位置付けが可能となる。しかし、それは、空間と時間とをただ分離したものとのみ考える表象²⁰⁾に対しては、「静止的な相互並在に対して無関心的に現象するもの」(ebd.)である。

この時間も、「**直観された成ること**」(das *angeschaute* Werden)(E § 258)としては、空間と同様に諸区別を持っており、ヘーゲルはそれを、「過去」、「現在」、「未来」という時間の3次元として語る。「現在」は、「外面性の**成ることそのもの**」(E § 259)であり、「過去」は、「無へと移行することとしての存在」(ebd.)、「未来」は、「存在へと移行することとしての無」(ebd.)である²¹⁾。しかし、「現在」は、個性性として他の契機を「**排除するもの**」(*ausschließend*)(ebd.)且つ他の契機に「連続的」なものとしては、過去と未来の「否定的統一」、「**今**」である²²⁾。ここで、これらの時間の諸契機を、空間の諸契機に対応させるならば、過去は点に、未来は線に、現在(今)は面に対応されうるのであろう(点が線となることが面である; 但し、「無関心的なものとして現象するもの」(E § 257)としては逆であらう)。

この「今」が、時間の真理であり、こうして、この「今」から時間は空間へとも還帰する。ヘーゲルは、時間と空間との関係を次のように述べている。

「**有限な現在**は、**存在するもの**として固定された「**今**」であり、[...]時間の過去と未来は、**自然**において**存在するもの**としては、空間である。というのは、空間は、否定された時間であるからである。そうして、止揚された空間は、さしあたって、点であり、そして、対自的に展開されると時間である。」(E § 259 Anmerkung P1)

しかし、このように述べられた(波打たされたロープの輪が移動するような)空間と時間の関係

は、両者の真理である「場所と運動」である。次に、これを考察したい。

1-3. 「場所と運動」の展開とその物質(Materie)への解体

ヘーゲルは、空間と時間の真理として、場所(Ort)と運動(Bewegung)を、それぞれ E § 260 と § 261 において語っている。順に考察していきたい。

(1)空間と時間の同一性としての「場所」

ヘーゲルは、空間と時間の統一をまず「場所」として述べる。

「空間は、自分自身において、無関心的な相互外在と区別のない連続性との矛盾、自分自身の純粋な否定性、そして、**さしあたって時間へと移行すること**である。同様に、時間は、一者へと総合された・対立したその諸契機が直接に自身を止揚するのであるから、無差別へと、区別されていない相互外在あるいは**空間へと直接的な崩壊し一致すること** [Zusammenfallen]である。そうして、空間において、**否定的な規定、排除的な点**は、もはや、ただ自体的にのみ概念に依拠しているのではなく、**定立されており**、そして時間であるところの総体的な否定性によって自身において**具体的**であり、そのように具体的な点は、**場所**である (§ 255, 256)。」(E § 260)

空間の「時間へと移行すること」、時間の「空間へと直接的な崩壊し一致すること」という両者の相互移行全体が、「運動」を形成するものである。しかし、さしあたっては、空間と時間の展開の成果として空間における(両者の一致としての)「点」の定立としてある。この「点」は、空間の展開の始めにおけるかの対自存在である。それが、今や、対自存在が対自存在として空間において定立されたもの、即ち、空間の展開の運動そのものを背負った点となっている。これが「場所」(Ort)である。そして、同時に、それは「今」であったのであるから、「ここ」でも「今」でもある「具体的な点」である。これは、わかりやすく言えば、「今」いる場所であろう(身体性)。このようにして、この「点」は、結果としての「諸次元の総体性」(E § 260 Zusatz)であり、常に「今」である持続(Dauer)の点である(ebd.)。

このように時間の展開の結論は「具体的な点」であり、こうして、時間は、定立された特殊性であり、(それ自体としては)空間-点という「判断」に対応する(これに対して「空間」の展開の成果はそれ自体としては点-線に対応する)²³⁾。この成果において、「空間」の 3 次元性(点、線、面)が時間の原理そのものであることが、「場所」において定立されている。定立された「具体的な点」は、3 次元性を、内的にも外的にも持ってあり、外的には、空間において 3 次元的であり、内的には、時間においてこの同じ 3 次性が時間原理でもあることが定立されている。そして、次に、これが(全ての点にとってそうであるように)「展開」されなければならない。これが「運動」である。

(2)空間と時間の矛盾としての「運動」

「運動」の概念

このように、ヘーゲルは、時間と空間の統一を「場所」として語る。しかし、「場所」は、空間

と時間の展開の直接の成果としての、このような空間と時間の「定立された同一性」(E § 261)であると様々に、「定立された矛盾」(E § 261)、即ち、「運動」である。

「[...] 時間が自身を空間的に場所として定立し、しかしこのような無関心的な空間性が同様に直接に時間的に定立されるという、空間の時間への、そして時間の空間へのこのような消え去ることと自己再生することは、運動である。」(E § 261)

空間と時間におけるそれぞれの「矛盾」において(E § 261)、空間は時間になり、時間は空間になる。ここで、空間と時間は、空間は「肯定的なもの」、「存在」として、時間は「否定的なもの」として(E § 260 Zusatz)、相互に移行する。これが「運動」である。こうして、「運動」は、真には、(時間との対立において空間が空間として定立されていることによって)空間が空間の否定であるという矛盾の完成であると言える。そして、この「運動」の展開は、点の運動、線の運動、面の運動として理解される。

「運動」の諸展開

E § 261 補遺において²⁴⁾、運動が、(直線運動の真理としての)「円運動」、「半径の運動」、「面そのものの運動」と展開されている。ここで、簡単にその要点を見ておきたい。

ヘーゲルは、円運動を、「時間の諸次元の空間的なあるいは存立する統一」(E § 261 Zusatz P2)と語る。これは、還帰する運動が空間的に定立されているからである。円運動において、「今」という中心が、「前が後であり、同様に、後が前である。」(ebd.)という形で、そして、「未来がではなく過去が目標である」という「時間の真理」(ebd.)において、両者が「無力化」(Paralyse「麻痺」)されて実在的に定立されている。

こうして、円運動から、半径の運動、面そのものの運動が述べられる。そして、その結果、ヘーゲルは、「面そのものの」運動の成果を次のように、「質量」(Masse)として語っている。

「あるいは、自身へと還帰していること、静止的な中心は、そこにおいて全体が静止へと沈められているところの普遍的な点となる。即ち、運動は、「今」、「前」そして「後」の区別をその諸次元あるいはその概念を止揚したところのその本質においてある。円環において、それらの諸次元は、まさに、一つのものにおいてある。円環は、持続の回復された概念、自身へと消えた運動である。質量[Masse]が、自分自身によって自身を濃くしそしてその可能性としての運動を示すところの持続するものが、定立されている。」(E § 261 Zusatz P2)

ここで、運動の展開の媒介によって(「質量」の定立に対応して)「物質」への解放がなされると言えるだろう。そして、この「質量」の定立は、円運動が、渦動における太陽のように中心に集中し、そこでは観念的なものともなっているというようになされている。このような「運動」の論を、一般に、「純粋な軸回転運動」の論として理解し、円の中心と円周を、観念的中心あるいは時間の純粋否定性の、円周としての空間への実在化として理解することは可能であるし、それは正しいだろう(「場所」における内在的円運動(今,前,後)が実在化されて「運動」になる。また、

観念性の実在性への移行に関しては、E § 261 Anmerkung の第 3 段に論じられている)。しかし、ここでは、同時に、「時間の諸次元の空間的なあるいは存立する統一」としての「円周運動」(Kreisbewegung)(ebd.)が論じられており、観念的なものと実在的なもの、(空間的)中心と円周という両関係が統一されている。即ち、ここにおいて、空間における円運動そのものが時間的原理ともなっている。

「運動」の展開の意味—射影空間論との比較において—

ここで、このことの意味を、射影空間論と比較しながら考察したい。そうすると、空間と時間の統一である「場所と運動」の成果は、「空間」の成果である射影直線(円環)と、「時間」原理(計量運動)である射影直線(円環)との統一(射影平面)であると言える。これが、それ自体としては、「運動」の原理である空間-線という「判断」を形成している。これが、A.「空間と時間」の展開全体の成果である。確かに、この展開全体において、それ自体としては空間-点-線という「推論」がある。しかし、ここで定立されているのは、「空間」の内部における還帰と同じ還帰である)「空間」から「時間」、「場所と運動」への展開の還帰の結果、空間の概念の「個別性」であり、その完成としての「判断」である。

このように定立された空間と時間の(両-射影直線の)統一は、射影平面である。この射影平面が、「空間」の展開の成果である「表面」の真の定立である(あるいは「表面」であることそのもの; 何ら中身の無いあるいは何ら外部のない表面そのもの)。射影平面が 3 次元空間の全ての方向に対応していることによって、ここで、最初に言われた「全く没規定的な 3 つの次元」(E § 255)が、空間の 3 方向(のみの空間)として定立されている。始元的空間の表面に漂っていた 3 次元性は、真には概念諸契機に他ならない。一方、次元(dimension)は、そもそも「計測」を意味する。対応して、空間における量的展開において、概念の運動は、一面においては計量運動として現れる。A.「空間と時間」の展開において、概念、即ち、始端と終端の統一としての円環が、空間を形成し、対自的には時間を形成することによって、最後に、不完全ながら射影平面として円環の円環を形成する(計量の計量、自己計量)。そこで、当初の概念諸契機が、個別的に定立されており、これが、空間の 3 方向なのである(さらに、この 3 方向が、それぞれ計量として定立されることによって「力学」は完成する)。

このようにして、「運動」においては、「空間」の展開における否定性(時間)そのものが空間の中に定立されている(あるいは、時間は直線の計量運動の原理であると言えるが、「運動」はそのものとしてはこの原理の定立である)。即ち、A.「空間と時間」においては、まだ、判断も推論図式もそのものとしては展開されていないが、ここで潜在的に対応する空間-点-線において、点-線が、点の線への運動、(射影直線としては)円運動であり、さらに、空間-点は、(円周と中心点との関係としての)半径の運動、即ち、線の面への運動、そして、空間-線は、面(射影直線)の運動である(これが射影平面の定立である)。これらの諸展開において、円運動が、そのものとしてと同時に、その原理としても射影空間の無限遠平面上の円(運動)(=時間的原理)とし

て空間的に定立され、かの概念であった「場所」が空間的であり時間的であることそのものが、ここで定立されている²⁵⁾。

このように完成した「円運動」が上の E § 261 補遺において「質量[Masse]」と言われていたのである。それでは、次に、1.の最後として「場所と運動」から「物質」への解放について考察したい。

(3)「運動」と空間の自己還帰

「運動」において、空間は、自己還帰として定立されており、「運動」は空間と時間の現実性である。こうして、「運動」は、(一つの推論として考察すると)空間と時間という両円環(判断)を結ぶものであり、空間と時間を連結し、「諸円環の円環」を形成する第三の円環(結論命題)である。しかし、これは、この形成された推論そのものとしては、「物質」(Materie)である。

「しかし、このような成ること[運動]は、同様に、その矛盾が自身へと崩壊し一致すること[Zusammenfallen]、両者の**直接に同一的な現存在する統一、物質[Materie]**である。」(E § 261)²⁶⁾

「運動」である、空間と時間の「矛盾」の結果は、「両者の**直接に同一的な現存在する統一**」、即ち、空間と時間の統一の現存在であり、これが「物質」(Materie)である(ebd.)²⁷⁾。さて、ヘーゲルは、E § 254 の補遺で、次のように語っている。

「しかし、**絶対空間は[絶対空間に対して]或るずっと高いものである。というのは、それは何か或る物質的物体[materieller Körper]が規定された空間であるからである。しかし、抽象的な空間の真理は、むしろ、物質的物体としてあることである。**」(E § 254 Zusatz P1)ここで、ヘーゲルは、絶対空間を抽象的なものと見なし、それに対して、「物質的物体」(materieller Körper)をその真理としている。絶対空間は、むしろ「場所」であろうが²⁸⁾、「物質的物体」こそ、「空間と時間」の真理として定立されたものである。この「物質的物体」が、「**本質的に、空間的且つ時間的**」なものとして、B.「物質と運動」において登場する。

「[...] 同様に、直接的には、物体は、その観念性から区別されており、そして、確かに、**本質的に、空間的且つ時間的**であるが、しかし、空間の中に且つ時間の中にあるものとしてあり、そして、空間と時間のこのような形式に対して無関心的な内容として現象する。」(E § 263)

「物体」は、言わば、運動の主体、運動するものである。こうして、この「力学」(Mechanik)の B.そして C.において、このような「物体」が、(空間の自己還帰によって、しかし、さしあたって)空間-時間に無関心的なものとして²⁹⁾、その中を運動し、この「物体」に対して、慣性や衝突・落下などの力学的な諸法則が問題となりうる。しかし、このような力学的な運動³⁰⁾は、真には、「空間」の展開において個別化された諸空間が、自らの内部で時間的でありながら相互に外的な空間において「運動」している姿であると言えよう。換言すれば、物質と運動(中心)は、(形式的に解放され)現実化された空間と時間であり、物質と運動のこのような連関が、C.「絶対的力学」(Absolute Mechanik)において諸推論の体系として回復(実現)されるのである³¹⁾。

2. ヘーゲルにおける「物体」論

以上、ヘーゲルの「自然哲学」における空間と時間の展開を見てきた。自然哲学において、この後、B. 物質と運動、C. 絶対的力学と展開がなされる。以下では、ヘーゲルにおける「物体」概念が如何なるものであるかを、自然哲学における展開と論理学における展開において位置付けることによって明らかにしたい。

2-1. 自然における「円環の円環」の展開

そこで、まず、「力学」を中心として「自然」の領域における展開を追うことにしたい。

(1)「有限な力学」の展開

ヘーゲルは、「B. 物質と運動. 有限な力学」(Materie und Bewegung. Endliche Mechanik)を、「a. 慣性的物質」(Die träge Materie)、「b. 衝突」(Der Stoß)、「c. 落下」(Der Fall)と展開させる。

物質と中心

最初に、ヘーゲルは、「物質」(Materie)の「反発」(Repulsion)と「牽引」(Attraction)という(むしろ「動力的」)原理を述べている(E § 262)。反発は「個別化の契機」であり、牽引は「連続」をもたらす。これらは、「物質」という普遍に対する特殊な2力と言ってよいであろう。そして、両者の統一である「個別性」が「中心」(Mittelpunkt)である。

「**個別性**は、それ故に、理念の規定として確かに現前しているが、しかし、ここでは、**物質的なものの外**にある。物質は、それ故に、第一に、本質的に、それ自身、**重い**。それは物質に外的なまたそれから分かたれうる性質ではない。重さは、物質の実体性を形成しており、それそのものは、しかし、(これは他の本質の規定であるのだが)**物質の外**に属する **中心**への努力である。」(E § 262 Anmerkung)

ここで、「中心」は、さしあたっては、まだ「観念的」である。即ち、「物質的なもの」にとって、その中心はその「外」にあり、「物質的なもの」に内在的なのは中心への努力である。これに対して、「重さ」は物質に属し、その「有限性」を特徴付けている。即ち、「**重さ**は、言わば、その対自存在における物質の自己外存在の否定性、その非自立性、その矛盾の告白である」(ebd.)。そして、ヘーゲルは、(カントと異なって)「重さ」を物質に本質的なもの、「自己内存在」(ebd.)として位置付けるのである³²⁾。

物質と質量そして物体

ここで、「物質」と「質量」そして「物体」の区別に関して、次のヘーゲルの言及が参照されよう。

「物質[Materie]は、さしあたって、単に普遍的そして直接的にすぎないものとして、ただ**量的な区別**を持っているにすぎず、そして、相違した諸定量へと特殊化されている、**諸質量[Massen]**、これは、ある全体あるいは一者という表面的な規定においては、**物体** [Körper]である。」(E § 263)

即ち、「物質」は、この領域の普遍的なエレメントであるが、これがここで「**量的な区別**」のみを持っている。先の A.「空間と時間」の展開はこの物質の領域に対して質的である(点、線、面、

あるいは、過去、現在、未来という区別は質的である)。これに対して、「空間と時間」の展開の結果、「立体」(Körper)が定立され、ここでは、この「立体」を「一者」として量的な展開がなされるのである。このような一者が、「**物体**」(Körper=「立体」)である。そこで、その定量が、「質量」(Masse)³³⁾であり、諸物体はこれによってのみ区別される。即ち、「立体」とは言っても、(物質それ自体は「空間的距離」(E § 262 Zusatz)であり空間における「実在的限界」(E § 263 Zusatz)ではあるが)その「運動」を論ずるときには「点」にすぎず、ここでは、(運動において)アトムあるいは質点のようなものが考えられているに留まる³⁴⁾。

「絶対的力学」への移行

このような抽象的な「物体」の領域が、「有限な力学」である(E § 264 Anmerkung)。しかし、さらに「衝突」(Stoß)と「落下」(Fall)を通して、当初の内在的な「力」、牽引と反発が実在的なものとなり、そして、これら牽引と反発の矛盾が諸中心の間で定立されるに至る。即ち、

「このような関係は、それらの自立的な対自存在とそれらの概念において結合されていることとの**矛盾**であり、それらの実在性とそれらの観念性とこのような矛盾の現象が運動であり、しかも、**絶対的に自由な運動**である。」(E § 268)

このことをもって、「有限な力学」は「絶対的力学」に移行する³⁵⁾。

(2)「絶対的力学」の展開

C.「絶対的力学」(Absolute Mechanik)は、「力学」の最後に位置しその完成である。この「絶対的力学」においては、一つの「体系」(System) 「太陽系」(Sonnensystem) の形成が展開される。ヘーゲルは、E § 269 において次のように述べている。

「**引力**[Gravitation]は、**理念へと実在化されているところの**、物質的な物体性の真なるそして規定された**概念**である。**普遍的な**物体性は、本質的に、**特殊な**諸物体へと自身を判断し、そして、**運動**の中にある現象する現存在としての**個別性**あるいは主観性の契機へと自身を総合し、これによって、この運動は直接に**多くの諸物体の一つの体系**である。」(E § 269)

このような「**多くの諸物体の一つの体系**」(ein System *mehrerer Körper*)は、「**理念へと実在化されているところの概念**」であるが故に、(3重の)「推論」の体系を形成している³⁶⁾。この3重の推論は、かの「円環の円環」の形式に他ならず、この推論の運動の成果は、論理学における「機械論」に対応して、諸項のそれぞれが「中心」であることである。

「[...] その自己外存在のこのような否定における物質は、先に探究されたにすぎない中心、その自己、形式規定を、それそのものにおいて獲得した。[...]」(E § 271)

このように、自身の外に探究されそれに向かって運動が行われた「中心」が自身の中に獲得されるに至ることによって、物質は、「**個性性**」(Individualität)を持っている。

「物質は、対自存在を物質において発展させられておりそして物質がそれと共にそれ自身において規定されているというようにそれ自身において持っている限り、**個性性**を持っている。物質は、このようなあり方で、重さから自身を離し、自分自身において自身を規定

することによって、自身を顕示し、そして、それに内在的な形式によって、先に物質に対して他の、物質によってただ探究された中心としてのそれにこのような規定することが帰属していたところの重さに対抗して自ずから空間的なものを規定する。」(E § 272)

こうして、空間と時間の展開から始まった「力学」は、ここで、「円環の円環」を(「機械論的」に)完成させた。これによって、「太陽系を形成している形式諸規定は、物質そのものの諸規定であり、そして、このような諸規定が物質の存在を形成する」(ebd. Zusatz)ことになる。こうして、物質は「個性」を持っており、その結果、「物理学」(Physik)という新たな領域において、物質は、「質化された物質」(E § 271)として、各々の質的な規定を獲得することができる。ここにおいて、「物体」の内在的な大きさ(比重)も問題となりうる。そして、この展開は、「生命」へ向けての「物質的な自己内反省」(E § 262 Anmerkung P2)の萌芽となるのである。

(3)自然における「円環の円環」

それでは、「力学」の展開をヘーゲルの「自然哲学」全体に対して位置付けることにしたい。

自然の諸区分

ヘーゲルは、E § 252 において、「自然」の展開の区分を、力学、物理学、有機学としている。これに従うと、「力学」は、自然における普遍性の領域と言ってよい(「形式の統一」が内在化しておらず、観念的な中心への運動が展開される)。この「力学」の領域から、「物理学」そして「有機学」(有機的物理学)の領域への展開は、普遍性から、「特殊性」(E § 252)、個別性(「主観性」(ebd.))への展開である。

これは、自然哲学全体の論理学全体への対応に従ったものであり、この対応は、自然哲学の一つの「学」(論理学こそ「学」である)とするものである³⁷⁾。このとき、「力学」全体は、論理学の「存在論」に対応し、物理学と有機学は、それぞれ、本質論と概念論に対応する(E § 274 ff.の補遺において「物理学」と本質論との「論理的」対応が述べられている)。そこで、A.「空間と時間」全体が、質に、B.「物質と運動」は、量に、C.「絶対的力学」は、限度(Maß)に対応する。A.「空間と時間」の中では、「空間」、「時間」、「場所と運動」は、それぞれ存在、現存在、対自存在に対応する。

自然における「円環の円環」の意味

従って、「自然」における「円環の円環」は以下のように意味付けられる。「力学」の展開は、概念諸契機(メカニスム)の展開が、さらに判断、推論の展開を形成していく運動と言える(vgl. 1-1.(3))。このような展開の結果生じる総体性は、さしあたっては、「現存在の推論」の総体性であり、「存在論」の総体性に対応する³⁸⁾。「現存在の推論」の総体性が形成する「円環の円環」、即ち「3重の推論」は、「力学」全体の展開において形成され、C.「絶対的力学」においてその本来的な形式である「3重の推論」において表現されている。この「3重の推論」が、かの空間-点-線、点-線-空間(面)、線-空間-点である³⁹⁾。

A.「空間と時間」の展開の結果、確かに、空間は「立体」(Körper)として定立されてはいる。し

しかし、それはまだ抽象的なものに留まる。物質は(射影平面の 3 つの方向のように)空間的広がりではあるが、物質の運動が考えられる際には、それは質点のように広がりがないものであった。これが、B.「物質と運動」の展開によって「重さ」を獲得し、C.「絶対的力学」の展開によって(内的)体系性(個性)を獲得することによって、「力学」の領域全体を通して初めて具体的な「立体」(Körper)として定立されるのである⁴⁰⁾。このような「物体」の完成は、「物体」の「物体」自身に対する(しかしそれに留まる)解放であり、「物理学」的世界の形成である⁴¹⁾。しかし、「円環の円環」の形成が「絶対的力学」(現存在の推論)に留まらず、論理学-概念論の「客観」の展開に対応して、「物理学」(Physik)の最後に「化学的過程」(反省の推論)、そして、「生命」(必然性の推論)へと展開されて初めて(即ち「自然」全体において)、「3 重の推論」の総体性は(現存在の推論、反省の推論、必然性の推論が形成する「3 重の推論」として)完成し、そのとき、自然に「対して」、精神もその姿を現してくるのである。

以上に対して、論理学の本質論における「物」(Ding ; 事物)の考察は非常に意味がある。これを次に論じ、結論として、ヘーゲルの「物体」概念の意味を理解することにしたい。

2-2. 論理学における「物」(Ding)の位置付け

ヘーゲルは、『大論理学』において、「物」(Ding)を主にその本質論の B.「現象」(『エンチュクロペディー』の「論理学」においては A.「実存在の根拠としての本質」)の中で論じている。ヘーゲルは、そこで、「直観」(Anschauung)との関係において「物」(Ding)を論じていない。ヘーゲルにとって、「直観」は存在論に対応しており、本質論はむしろ「表象」の領域である。そこで、まず、存在論において「物」(Ding)が如何に考えられうるかを考察し、その上で、それと本質論における「物」(Ding)との関係は如何なるものかを考察したい。

(1) 存在論と「物」(Ding)

存在論においても、„Ding“や„Ding an sich“という語は(主に注釈的な箇所において)用いられている。しかし、これらの文脈においては、それらは「或るもの」(Etwas)と明確に区別されているとは言えない。ヘーゲルは、「或るもの」を「現存在するもの」(Daseinendes)として述べる。これは、一応は、現存在(Dasein)の諸区別の「自己内存在」とされる。しかし、「或るもの」(Etwas)は、「対自存在」(Fürsichsein)と異なり、その限界をその外に持っている。これに対して、対自存在は、限界と存在との統一であり、確かにこれが本質論における「物」(Ding)に繋がって行く。しかし、対自存在の「単純な自己関係」は、むしろ、限界そのものとしてのものであり、存在論全体において初めて、還帰の運動(反省)は完成する。

ヘーゲルは、『大論理学』本質論の導入部で(GW11 S.243)、本質と量を「限界」に対する「無関心性」において対比している。対自存在のように、量も限界そのものではあるが、それ故に、「量における限界は、直接に、外的な規定性である」(ebd.)。量においては、限界は量において「ある」ものである。これに対して、本質においては、「規定性は、ただ本質そのものによって**定立され**」(ebd.)、「本質の統一への**関係**の中のみ」(ebd.)ある。対自存在は限界そのものでは

あっても、自らを限界付けるものではないのに対して、本質は、限界付ける働き「そのもの」である(それ故に本質は限界に対する「絶対的無関心性」(ebd.)である)。こうして、本質は、限界の限界、無限界であり、さらには「限界付けるもの」として「物」(Ding)なのである。「物」(Ding)は、そのような実存在した本質として、存在論の総体性そのものと言える。

(2)本質と「物」(Ding)

本質は、存在論の領域における自己還帰そのもの、存在論の総体性の真髄であるが、このことが本質の領域を、反省の領域として特徴付ける。これは、本質が自らの足場そのものを転倒させることである。

ヘーゲルは、本質論において、「実存在するもの」(existierendes)として「物」(Ding)を語っている。「物」(Ding)は「本質」が「実存在する」ものである。「物」(Ding)は、「反省」の運動の限界である。反省は「無から無への」運動であり、これは他者(das andere, das negative)から自身への還帰である。これは、反省が他者を自身と見なすことであるが、反省が「他者」を定立することは、反省が「自身」を前提することであり、これは自己定立である。即ち、前提される「他者」(否定的なもの)の存在は反省自身であり、このような構造において反省はその存在を持っている。こうして、「反省諸規定」における反省の運動を介して、「物」(Ding)として定立される。この意味において、「物」(Ding)は、反省そのものであり、しかも、(根拠全体において)他者への反省を介して、自己内反省 = 自身への反省となった反省である。

本質は、存在に対するものとしての概念である。それは、あるときには、「物」(Ding)であり、あるときには、反省の働きである。「物」(Ding)もまた反省であり、主観も、それ自身、「物」(Ding)であると言える⁴²⁾。本質論は、それらの反省関係をも「現象」として展開する。ここで、「現象の法則」として、力学的諸法則もその場所を獲得し、全体と諸部分、力とその発現、内なるものと外なるものの本質的相関の結果、「現実性」において諸「物」(Ding)の総体性へと至る。

(3)「物」(Ding)と現実性

「現実性」は、様相論理の展開される領域である。そこで、ヘーゲルは、「現実的なもの」を、それ自身可能性として、他の現実性を定立するものとして描いている。このような運動は、「絶対的必然性」においては、完全に自己媒介運動となり、(現実性そのものがスピノザの実体であるのに対して)これはライブニッツのモノドロギーとも比較されうる⁴³⁾。諸物は、それ自身絶対的なものとして自己充足しており、それぞれ、自己発展するが、互いに調和している⁴⁴⁾。これは「概念」の形式的顕現である。

以上が、論理学における「物」(Ding)概念である。それでは、本稿の最後として、論理学と自然哲学との対応においてヘーゲルの「物体論」はどのように理解されるべきかを結論することにした。

3. 結論

以上の考察から、ヘーゲルにおける「物体」論は次のように理解されるべきである。

自然と論理学との論理的対応に対して、内容的対応として、学の自己確証、哲学体系(論理学、自然哲学、精神哲学)と論理学との一致に由来して、自然全体が存在論に対応させられる。その結果、存在論は、論理構造においては「力学」に対応するものであるが、その質、量、限度(Maß)といった諸規定は、それぞれ、力学、物理学、有機学の内容を受け入れる形式となる。即ち、「力学」の A.「空間と時間」における「空間」、「時間」、「場所と運動」は、それぞれ、質、量、限度(Maß)に対応し、A.「空間と時間」の成果である「物質」(Materie; 質料)は、存在論(に対応する「力学」)の中で内的に具体化されて、内在的体系性(個性)を獲得することによって、さらなる内容(本質論そして概念論、あるいは、物理学、有機学)を受け入れることが可能となる。このような予定的体系化は、そもそも存在の展開あるいは空間の展開の始元にあった理念の体系によって予め用意されている。このとき、本質と概念の展開は具体的内容の付与であり、自然は、存在論に対応するものとしては、本質と概念の影響においてその内容を獲得する⁴⁵⁾。

このことは、わかりやすくは次のように言ってもよい。対自存在は、まだ普遍的形態を持っていない。言い換えれば、それは、まだ本質的内容を受け入れる器の原石にすぎない。本質そのものに移行するためには、存在において、この原石が掘られ本質を受け入れるための器が形作られる必要がある。これが、量と限度(Maß)の展開である。本質を受け入れてそれらが一見解体することによって、本質そのものが展開していく。しかし、真には、本質論の展開は、器に水とぶどう酒を注ぎ込み皿とパンをのせる過程にほかならない。即ち、概念が「現象」し「顕示」されるのである。従って、対自存在は直観そのものであるが、本質は直観として定立された直観である。そして、「物」(Ding)が、直観の中身であり、そこに真理が映っている。そして、それに留まらず、かの原石そのもの(空間)もまた概念の威力においてある。

こうして、「物体」は、器となり、精神を受け入れることによって、生命であると言えよう。このようにして、ヘーゲルの弁証法はその内容に最もふさわしい器であり、その「物体」論において、プラトンとアリストテレスも、スピノザとライプニッツも統一されているのである。

< 註 >

- 1) 本稿は、日本哲学会 2005.5 における発表に修正・加筆したものである。
- 2) 『エンチュクロペディー』第三版においては、Erste Abteilung Mechanik の A において論じられる。第一版においては、Erste Abteilung は Mathematik であり、その中で、第三版の Erste Abteilung Mechanik の A に対応する内容のみが展開されており、第三版の Mechanik の B, C に対応する箇所は、Zweite Abteilung Physik の A である Mechanik において論じられている。
- 3) 『大論理学』(GW21 S.66-7)においては、それが「量」からではなく「質」から始まることを、まず始めに存在と一体となった諸規定が述べられるべきであるからと明示されている。
- 4) 絶対的理念がここで空間的な点として定立されることは、ライプニッツにおけるモナドと点の関係を思わせるものであろう。

- 5) 『大論理学』(GW21 S.178 L.23)において空間と時間は(質料や自我もまた)純量の例として扱われている(u. vgl. GW21 S.168, E § 99 etc.)。また、空間と時間は『大論理学』において例として度々登場する。本質論においては、特に「現象の法則」における法則の例として空間と時間の関係が取り上げられている。
- 6) 本稿では基本的に『エンチュクロペディー』第三版に従って論じる。なお、Eは *Werke*, E.Moldenhauer, K.M.Michel (Red.), Bd.8-10 を示し、P*は該当箇所の第*段を表す。また、GW[1-22]は、*Gesammelte Werke*, Rheinisch Westfälische Akademie der Wissenschaften (Hrsg.), Hamburg, Felix Meiner, Bd.1-22 を示す。『エンチュクロペディー』は、論理学、自然哲学、精神哲学の3部門からなるが、「自然哲学」の区分は、『エンチュクロペディー』第三版においては、Mechanik, Physik, Organische Physik であり、Mechanik においては、A. Raum und Zeit, B. Materie und Bewegung. Endliche Mechanik, C. Absolute Mechanik と展開される。さらに、A. Raum und Zeit の区分は、a. Der Raum, b. Die Zeit, c. Der Ort und die Bewegung である。なお、上註2のように、第三版と第一版の区分は異なる。なお、加藤尚武氏の邦訳と Petry の英訳も適宜参照させていただいた。
- 7) イェーナ諸体系構想の03/04においては、Mechanik は論じられるものの空間-時間論は主題的に論じられていない。また、04/05 と 05/06 においては、『エンチュクロペディー』諸版と異なり、「エーテル」(Äther)論がその最初に登場し、その後、空間と時間が展開される。ただし、04/05 では、時間の展開が空間の前に置かれている。イェーナ諸体系構想については、GW6-8 の他、本田修朗氏の邦訳も参照させていただいた。
- 8) GW20 には、「[しかも、]」([und zwar])はない。
- 9) これらの諸規定は、相連的であるだけで「区別されているべきであるがまだ如何なる区別でもない」諸方向である。なお、イェーナ体系構想 05/06 においては、「空間」の„*dritte* Stellung der Dimensionen“に、空間の諸次元が、高さ、長さ、幅の相連的諸規定として位置付けられている。s.下註11。『エンチュクロペディー』においても、空間が„an ihm“に持っているものがこれから展開され演繹されるのである。
- 10) 点から線、面へといった空間の展開は古代から(近代まで)あるものであるが、ヘーゲルにおいては、これがイェーナ体系構想(04/05,05/06)において、また「惑星の軌道に関する哲学的論考」においても登場している。しかし、それぞれ、位置付けが異なっている。「惑星の軌道に関する哲学的論考」においては、空間の展開は精神と時間との関係において論じられており、「運動」の概念への顧慮が前面に出ている。この傾向は、イェーナ体系構想 04/05,05/06 と徐々に背後に退いている。
- 11) ヘーゲルはこの逆の展開もまた同じ必然性として述べている(E § 256 Anmerkung P1)。また、イェーナ体系構想 04/05 においては逆の展開が「空間」において論じられ、点から線、面への運動は、「運動」において展開されている。イェーナ体系構想 05/06 では、点から線、面への展開によって規定された空間が定立され、そこでの展開として逆の展開が「空間」の論において述べられている。『エンチュクロペディー』においては、両展開の関係をヘーゲルは述べていないが、点から線、面への展開が基本に考えられていると言える。しかし、v. Griesheim の Nachschrift(1823/24)には、空間の相連的な3方向が述べられた後に、両展開が *der eine Weg* と *der zweite Weg* として簡潔に述べられている。
- 12) 点がこのような接触点であることは、後に(vgl. 1-3,、さらには「自然」全体において)定立される。
- 13) 反省の運動において、自己内反省、他者への反省、自身への反省は一つの自己内反省 = 自身への反省である。このような2重の反省構造は、概念において、諸円環の円環構造となる。これは3重の「推論」展開の諸図式をとる。「円環の円環」と哲学体系そして学の自己解放に関しては、vgl. 「ヘーゲルにおける「学の自覚」の構造」、広島大学文学部・文学研究科哲学研究室編、シンポジオン復刊49号, 2004.3
- 14) ここで、ヘーゲルは„Anschauung“とは言っていないが、理念あるいは精神が空間であることそのものが、„Anschauung“であると言ってよい。
- 15) 「空間において、面は、確かに、否定の否定であるが、しかし、その真理に応じては、面は、空間から区別されている。空間の真理は、時間であり、そうして、空間は時間になる。」(E § 257 Zusatz)。また、このことは、後で「運動」として定立される。
- 16) このような囲まれた空間と表面は、Etwas と Bestimmtheit と考えてよいだろう。「表面」という表現は、『大論理学』(GW21 S.112, GW11 S.73)の「有限性」においても登場し、また、その(GW21 S.115)b.の最後などにも点から「全空間」(der totale Raum)への弁証法について述べられている。ただし、ここで(E § 256)、「**個別的な**全空間」そのものが定立されているわけではない。
- 17) それは、A.「空間と時間」の結果、(物質的)「物体」として登場し、「力学」全体において完成する。
- 18) かの直線そのものはむしろ「無」である。また、この射影直線は、方向のみを含んだ2次元空間に等しい(詳しくは、射影空間論に関する文献を参照されたい)。ここに面の概念がある。
- 19) „dimension“は、もともとラテン語として「計測」の意味を持っている。
- 20) vgl. E § 257 Zusatz. この空間と時間の分離は、そのものとしては **B.物質と運動**において定立される。

- 21) E § 259 Anmerkung において、「時間の諸次元は、ただ主観的表象においてのみ必然的である」(sie sind notwendig nur in der subjektiven Vorstellung.)と述べられているように、時間の 3 次元は、自然においては、「存続する区別」(der *bestehende* Unterschied)には至らず、「必然的」に、あるいは、時間を貫く主観に内在的に区別があるわけではない。このことは、時間の 3 次元が自然の規定でないことを意味しない。ヘーゲルにとって、時間は外的な自己である。「時間は、空間のように、**感性**あるいは**直観の純粋な形式**、非感性的な感性的なものである。— しかし、空間と同様に、時間にもまた、客観性と客観性に対する主観的な意識との区別は何ら関係していない。このような諸規定が空間と時間へと適用されるときには、空間は、抽象的な客観性であるが、しかし、時間は、抽象的な主観性であるであろう。時間は、純粋な自己意識の Ich = Ich と同じ原理である。しかし、この原理あるいは単純な概念は、まだその完全な外面性と抽象においてあり、— 直観された単なる**成ること**として、端的に自身の外に至ることとしての純粋な自己内存在としてある。」(E § 258 Anmerkung P1)。ただし、自然はまた、絶対的理念の自然と精神への根源分割においてある。ヘーゲルにとって、時間は、主観的であると同時に客観的であり、諸学の円環の体系において両者は統一されている。また、空間と時間が、主観客観であることについては、次のようにも述べられている。「空間の本性については、昔から多様に述べられている。私は、空間も時間も**感性的直観の形式**であるという**カント**の規定のみに言及する。[...] カントの概念において主観的観念論とその諸規定に属しているところのものが無視されるときには、空間は単なる形式即ちある**抽象**でありしかも直接的な**外面性**の抽象であるという正しい規定が残っている。」(E § 254 Anmerkung)
- 22) ヘーゲルは、「真なる現在は、永遠性である。」(E § 259 Zusatz P1)とも言う。また、永遠性については、Zusatz 以外においては E § 258 Anmerkung にある。
- 23) ここで、空間の 3 次元性(点、線、面)は、射影直線の中にあると言えるが、この射影直線は、無限遠(射影)直線としては、時間の原理そのものである。「場所」において、この両者が統一されている。
- 24) E § 261 本文において「**運動**」と「**物質**」が述べられた後、その注釈において「物質」について 4 段落にわたって述べられているが、「運動」については、(編集者によって)補遺に取り上げられているに留まる。しかし、そこで、(イエーナ体系構想 05/06 と同様に)直線運動が、自己止揚の運動として述べられ、その真理として、円運動が開展されている。イエーナ体系構想(05/06)の「運動」の論において最初にある「持続」(Dauer)は、E § 260 の補遺に挙げられている。また、特に、円運動の開展の叙述は、簡潔に述べられているが、イエーナ体系構想(05/06)の記述にほぼ対応している。ただし、イエーナ体系構想(04/05)においては、対応する円運動の論は、実在的な運動の論の中で論じられている他(勿論『エンチュクロペディー』(第三版)でも、円運動は C.「絶対的力学」の中でケプラーやニュートンなどと共に取り上げられている)、『諸講義』では、空間と時間の統一が、物質と運動として端的に立てられ、運動から物質への移行を円運動の論が媒介する形式となっていない。
- 25) アリストテレスの「場所」はこのような「運動」の開展の成果として考えられうる。抽象的な点は射影平面において射影直線を運動の原理として(この射影直線の上に乗っかってあるいは包まれて)運動する。
- 26) 第三版のこの箇所に対応して、第一版においては、「— 成ること、しかしそれ自身同様に直接に両者の**同一的な現存在する統一**、**物質**であるところの成ることである。」(HE § 204)となっている。ここで、第三版では、「運動」から「物質」へと「矛盾」が解消することが明確である。
- 27) vgl. „Die *Materie* ist so die *abstrakte* oder unbestimmte Reflexion-in-*Anderes* oder die Reflexion-in-sich zugleich als *bestimmte*;“ (E § 127)
- 28) より正確には B.「物質と運動」の a.慣性的物質における「静止」としての運動が相対空間と言えるだろう。B.における物質と運動の分離と統一への運動は、絶対空間と相対空間についても同様と言える。
- 29) このような無関心性は、「場所」に対しては発展であるが、しかし、さらなる展開において克服されるべきものである。即ち、物体と、空間、時間あるいは運動との関係の内化、あるいは、空間と時間の非静止的關係の物質への内化(vgl. E § 263 Anmerkung)こそ今後の展開であり、これは、最終的に、「生命」へとっていくものである。vgl. E § 274 Zusatz.
- 30) B.「物質と運動」の導入部(E § 262)は、カント的な意味での「動力学」に対応していよう。
- 31) これが、かの諸円環の一応の完成、解放である。こうして、物質の「個性性」(Individualität)と言っているのは、C.「絶対的力学」における諸物体の 3 重の推論の成果としての Physik においてである。
- 32) しかし、まだ抽象的な「自己内存在」に留まる。なお、ヘーゲルは、「比重」(die spezifische Schwere)を内包量とする。この「比重」は、Physik の B.a.で論じられるものである。「物質と運動」においても、E § 266 において、「重心」(Schwerpunkt)に集中させられた重さを内包量としている。しかし、「比重」のように或る物体の特殊な規定は、本来「力学」では論ぜられない。
- 33) vgl. E § 293 Zusatz. なお、ここで、「質量」は、「重さ」に関係しては重力質量である。他方で、物体は空間と時間に無関心的なものとしては、「静止」である(これは空間と時間への無関心性であるから絶対

- 的静止を意味せず慣性運動を意味する)。後者において、「質量」は(抵抗を意味する)慣性質量である(E § 264 Zusatz)。
- 34) E § 274 Zusatz において、「力学」における運動が、(おそらく B.「物質と運動」においては)運動と物質の相互移行として特徴付けられている。運動における物体が点としてあることについては、vgl. E § 271 Zusatz.
- 35) B.「物質と運動」の展開は、慣性が線-空間(時間-運動)、衝突が点-線(空間-時間)、落下が点-空間(空間-運動)であり、全体において、点-線-空間(面)(空間-時間-運動)が定立される。
- 36) vgl. E § 269, 同 Anmerkung u. § 198, 同 Anmerkung. 「このさらに詳しい規定は、それ自身 3 つの諸推論の一つの体系であるところの総体性の推論においてあるが、それは客観性の概念において述べられている(s. § 198) (E § 269 Anmerkung)。これは、(例えば、)「太陽系」の 3 重の推論(太陽、地球、月)である。「太陽系」は Mechanik の C.において論じられる他、Physik の A. a. Die freien physischen Körper においても論じられる。両者の違いは、前者が、「重さ」の体系あるいは或る「中心」の体系であるのに対して、後者においては、「個性性」を獲得したそれぞれの(物理的な)規定の獲得である。なお、「3 重の推論」に関しては、「ヘーゲル論理学における存在と本質の位置付け」、広島哲学会編、「哲学」第 56 集, 2004.10 等で論じた。
- 37) 例えば、B.の初めに「物質」(Materie)の反発と牽引が論じられているが、これは、論理学においては、存在論の「対自在」に対応されるものである。この対応に対して、他方では、「自然」全体が存在論に対応し、力学、物理学と有機学は、それぞれ、質、量と限度(Maß)に対応している。これは、哲学体系全体、即ち、論理学、自然哲学、精神哲学を「学」とみて、学である論理学の区分において自然を存在論に対応するものである。自然は、存在する理念として、絶対的理念の論理学内部への解放が存在(論)であるのに対して、論理学外部への解放が自然である。しかし、論理学が学でありながら、諸学の体系において自身を学として確認するという学の円環構造に、両者のズレ(諸円環と円環の区別)は由来しているから、本来、両者は一致すべきものである。そこで、両者の真理である第 3 の対応として、「力学」、「物理学」、「有機学」が、それぞれ「学」とする対応がある。つまり、この「諸円環の円環」の解放は、論理学が学として確認されると同時に、このことが、同様に円環の円環である論理学の内部で存在論が一つの学として解放されることを意味している。なお、D. Wandschneider(Räumliche Extension und das Problem der Dreidimensionalität in Hegels Theorie des Raumes: in *Hegel Studien* Bd.10, 1975)は、「空間」の展開を「質論」の展開に対応させている。
- 38) s. 「ヘーゲル論理学における存在と本質の位置付け」、広島哲学会編、「哲学」第 56 集, 2004.10
- 39) ヘーゲルの弁証法の「円環」の形成は、第一に、「空間」の展開において、第二の否定としての「面」が定立されるに留まらず、面が「表面」として展開することに現れていた。空間は、「空間」、「時間」、「場所と運動」と展開することによって、自己還帰として定立される。しかし、これはさしあたっては「判断」の定立であり、B.「物質と運動」の展開の結果、推論の形式が定立される。この展開の結果初めて、A.「空間と時間」も一つの円環(即ち推論：空間-点-線)として定立され、B.「物質と運動」も C.「絶対的力学」も、それぞれ、点-線-空間(面)、線-空間-点として定立される。
- 40) A.「空間と時間」において射影平面が定立されたように、B.「物質の運動」において射影空間が定立され、C.「絶対的力学」において 4 次元射影空間(RP4)が定立されると言える。
- 41) 本来の「3 重の推論」において、空間-点-線、点-線-空間(面)、線-空間-点という 3 つの円環は、力学、物理学、有機学の総体性である。「自然」の解放において、これらの 3 つの円環と同時に、例えば、A.「空間と時間」、「力学」、「自然」といった垂直的な円環の 3 重構造も形成され、ここで、かの「物質」も解放されている。
- 42) このとき Ding は、むしろ Seele と言うべきである。
- 43) こうして、「現実性」の運動はスピノザとライブニッツの統一であり、その完成が「概念」である。
- 44) ヘーゲルにとって、「現実性」はエネルギーであり(vgl. E § 142 Anmerkung u. Zusatz)、諸様相の展開のエレメントである。真に現実的なものは、可能性、現実性、必然性を含み、自らを展開させる。また、ヘーゲルは、『エンチュクローペディー』第一版を締めくくる GW13. § 192 において、「**対自的**に理念であるところの思弁的な理念」である「無限な**現実性**」が自身を「自然」として解放するとしている。しかし、第三版においては、この「無限な**現実性**」が「直観」の働きと言われている。このことは、「対自的な理念」が、「無限な**現実性**」であることと、「直観」の働きであることは同じことを意味していると考えてよいであろう。
- 45) ここに、存在論内部と、存在論と本質との関係における、二重の Form-Materie 構造がある。

主指導教員(佐藤徹郎教授)、副指導教員(井山弘幸教授・栗原隆教授)